「日々の理科」（第 2529 号）　2021,-6,16

「アゲハの成長観察コーナー（４）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

オクラは「一人一鉢」で栽培活動をしている。教室で観察する場面でも、自分の机に新聞紙やぞうきんを置いて「自分のオクラ」を継続観察できる。しかし昆虫の場合「一人一カゴ」で飼育するのは難しい。どうしてもクラスや学年全体で共有するしかない。

「アゲハの観察コーナー」は、理科の授業の時はその教室に持っていくようにしている。キャスターとついた荷台に載っているので、移動は容易である。観察はできるだけ密を避ける為に、交代でさせている。例えば、オクラの観察中に、班ごとに呼ぶとか、オクラの観察が終わった子どもから順に幼虫を見るという具合である。

「鉢植えの柑橘類」の利点は「幼虫に常に新鮮な葉を与えられる」ということだろう。鉢自体に水を与えておけば、あとは「自動給餌」してくれる。今回使ったのは、子どもの一人が持ってきてくれた「レモンの鉢植え」だが、約 10 匹のアゲハの幼虫が「共同利用」していた。

幼虫が小さいうちはよかったのだが、どんどん育ってくると、ものすごい勢いで葉が食べられていく。青々と茂っていたレモンの葉は、一週間もすると無残にボロボロになり、葉によっては中心の葉脈を残して完全になくなってしまった。

このままではレモンは枯死、幼虫は餓死してしまうので、やむを得ず校庭のナツミカンの枝を切って、それを与えてみた。実はその前に鉢植えのサンショウの葉に幼虫を載せてみたのだが、まったく食べなかった。サンショウもミカン科なので期待していたのだが、味がちがいすぎて受け付けなかったようだ。

しかし、レモン→ナツミカンの「乗り換え」はまったく問題なかった。幼虫を移すと、すぐに食べ始めた。この大きさの幼虫が葉を食べる音は、私の耳でも聞き取ることができた。